
信じてるから、疑う

岸川 澪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

信じてるから、疑う

【Nコード】

N0449Z

【作者名】

岸川 濤

【あらすじ】

俺は、工藤新一

今は20歳で、志保と結婚して一年・・
最近気になっている事・・それは・・

志保が異様な行動をすること・・
浮気をしているのかもしれない・・

そう思い調査した・・結果は・・？

1話

俺は工藤新一

今は20歳で、18の時組織を潰す事に成功した

そしてその後、志保が自殺しようとしているところを止め告白し、結局生きる道を選んで、俺と付き合ってくれた

一年間付き合い、俺は志保にプロポーズをした

志保は喜んでくれて、それから一年

蘭は快く二人の関係を受け入れてくれて、今は同じ大学の先輩と付き合っている

すべてが何もかもいい方向に進むはずだった・・・が・・・

最近志保の行動に目を光らせていた

新一が仕事で事件の捜査や浮気調査などをしている間断り無く出かけたり、家に誰かが来たようにいつもぐちゃぐちゃの俺の靴がそろえられていたり、リビングが片付けられていたり・・・

夜帰っても夕飯と置手紙だけだったり、ちょっと高価そうなネックレスをつけていたり

一番不審なのは、出かけるたびに、結婚指輪をつけず、その代わりに俺の前でつけないネックレスをつけていることだ

もしかしたら志保は浮気をしているのではないか・・・？

(特に、異様にべったりな黒羽とかめっちゃ怪しい)

俺は、誰にも秘密で調査する事になった・・・

1 話（後書き）

リクエスト作品です

多分ろくなものにならないと思います（私のせいで）

失敗

「くっそー!!」

俺はそう叫び、齒軋りをする

調査をはじめてから一週間

一週間だぞ!?

なのに写真の一枚も手に入らない

尾行すれば撒かれるし、志保のジャケットにあらかじめ発信機と盗聴器つけりやとってつぶされるし

しかもやっと思いき先つかんだと思ったら・

（空想）

「待ち合わせ・・・か」

俺は今日母さんに借りた変装道具で一応変装してる

周りを見渡す志保がこっちを見た

俺は急いで手にある携帯をいじるフリをした
一応ばれなかったらしい・

でも・

「あれ・・・？」

新一？」

「うげあああああ！」

「何してんの？」

「あ、あ、あ、シーっ」

「ふーん、そつか・

浮気調査・ねえ？」

「一応極秘なんで、誰にも言うなよ」

「でもさ、その変装はまずいつて

だって私、迷わず新一だと思ったもん」

（終）

尾行した晩「ストーカーみたいな真似するなら別れるから」なんて
いわれるし！

「いったいどうすりやいいんだよ！！」

俺の声は家中に響いた

そういえばガキの頃相手にされなくて家に帰ってくるなり泣き叫んで
執筆中の父さんに怒られたっけ・

「何叫んでんのよ」

「しっ・・・志保・・・」

「何よ、人を化け物みたいに」

「別にそうじゃねえけど・・・」

「あら、そう・・・」

「どこ行くんだ？」

「忘れたの？」

ほら、今日は・・・」

訪問

「今日は黒羽君が来る日じゃない」

「はあい？」

「だから、迎えにいくこうと思って
あの人、車ないから」

「あんだと?!」

「なによ」

「あのっ・・・それは・・・」

「なんでもないです・・・」

「やばいやばい・・・」

志保のこと疑って黒羽といふんじゃないかと思ってるなんて知られたら離婚させられるぜ・・・

「そう・・・」

「じゃあ、行ってくるわ」

「行つてらっしゃい・・・」

「っていいのによ?！」

ひとつの車にアイツと志保が乗るんだぜ？！

黒羽だったら何しでかすかわからねえし・

「やっぱ俺も行く！」

「は？」

「何だよその反応」

「別に

あなたが進んで黒羽君を迎えに行く時いつしよに行くなんていわないから・・・」

「あ、それはつまり・・・お前一人で迎えに行くと何か危ない事になるかもしれないだろう？」

「・・・そうね・・・

行きましょう」

「ああ・・・」

車に乗り込み、運転席に座った志保の腕の動きを見ていた

しばらくしてついた黒羽の家に志保が入って行って、もう10分近くたつ

「まさか・・・」

「そのころの黒羽家」

「だから、どうして新ちゃんまでつれてきちゃったわけ？」

「仕方ないじゃない、あの人が来るっていうんだから」

「だーから、どうしてダメっていわなかったの？」

「だったらどうしてダメなのって聞かれるでしょ！」

「そうだけど、ほかにごまかしようがあるでしょ？」

「仕方ないでしょ」

とにかく行かないと、それこそ疑われるわよ」

「終」

「久しぶりだねー新ちゃん」

「おい、遅すぎるぞ
何やってた」

「あ・・・それはね・・・」

「私が入ったことに驚いて黒羽君がお皿割ったから、その後始末してたら黒羽君に電話が来て、それが家の電話で、おしゃべりな人だったからなかなか離れられなかったのよ」

「ふうん・・・」

（さっすが志保ちゃん嘘上手・・・）

「車、出すわね」

ギアレバーを力強く引き、ハンドルをきった

数分たって付いた二人の家は相変わらず綺麗だった

志保ちゃんのおかげで掃除はちゃんとされていて、埃ひとつない

「どうぞ」

志保ちゃんがお茶を出してくれた

「ありがとうー」

暖かい紅茶は、志保ちゃん特製の味

志保ちゃんはすべてを置くと、キッチンにお盆を片付けてからこっちに来た

「黒羽は何で今日来たんだっけ？」

「何でもいいじゃん」

「よくねえよっ！」

目を開いて怒鳴る新ちゃんの顔は面白い

その数分後、新ちゃんはずっかり眠ってしまい、俺たちは二人きりの身になった

「作戦、成功ね」

「だね」

俺たちは地下室に入った

「ちよつと、こんなんじゃ全然ダメよ！

さすがに私でも喜びやしないわよ」

「そうかなあ？

俺としてはなかなかいいほうだと思うんだけど」

「あのね、私達はこんなことをするためにこの作戦をたてたわけじゃないのよ！」

「いいじゃんいいじゃん

ほらほら、こんなのなんてどーう？」

「なによ・・・

さっきのと大して変わんないじゃない」

「そうかなあ？」

**

「んん・・・」

目が覚めてみると、そこはソファのうえ

部屋には誰もいない

あったはずの紅茶も無ければ、二人の姿も無い

まさか黒羽が志保を襲ったとか？

やべえっ……

地下室に下りて、ドアの前まで来てみると、二人の笑いあう声が聞こえる

勢いよくあけてしまった

「おいっ!!」

「あら、起きたの？」

「なに、してんだよ・・・」

そこには、デスクに向かっている二人、デスクの上には志保のノートパソコンがある

「なにかしらね？」

「なんだろうね？」

二人の返答は同じものだった

志保はパソコンをきると、部屋をでた

「で、なんで俺は眠ってたんだ？」

「だから、紅茶飲んであつたからだかなんだか知らないけど、寝ちゃったのよ」

突然、
ね？」

うん

「こっくり寝ちゃったよ」

「なわけねえだろ!!」

俺は幼稚園児か！！

バカにすんじゃねえぞっ!!!

「俺、
帰るね」

「送る？」

「大丈夫」

きつと、誰かさんが付いてくるしな」

「そうね・・・」

「誰かって」隠してる事になってねえええええええ！

でも・・・情報キャッチ

パスワード

黒羽と二人でパソコンを見ていたという事はパソコンにヒントがあるんだな？

思って、地下室に忍び込んだ

今日は志保はいつもどおりどっかに出かけていない

そのうちにパソコンを覗き見して証拠を突きつけてやる

そう思ってパソコンを立ち上げた・・・が・・・

「はああっあああ
あああああ
あああ!!!!
??.??.?

パスワードを入力しろだあああああ！？」

そう、電源をつけたら、パスワードを入力しろといってきた

いろいろ試してみた

志保の誕生日、明美さんの名前、俺の誕生日、俺の名前、結婚記念日、博士の誕生日、A P T X 4 8 6 9、s h e r r y、まさかとは思ったが、志保のフルネームなど・・・

どれも間違っていて、データが開く事は無かった

俺に見られると思ってパスワードかけてやがんだな・・・

そりゃそうか

「くそっ!!」

「ただいま」

「おかえり・・・」

「そういえば志保、どうしてパソコンにパスワードかけてあるんだ？」

「何でそれを知ってんのよ」

「いや・・・間違って電源を・・・」

「は？」

付くわけ無いでしょ

いつもモニター閉めてるから電源ボタンなんて押せないわよ

あなた、覗き見しようとしたわね？」

「ちがうつー!!」

「ふうん？」

尾行の次は覗き見・・・ねえ？

ストーカー以外の何とていいのかしら？

こっちは離婚する気よ」

「お願いしますうううう

それだけはお許しを・・・」

「あ、そ

じゃあ答えてあげる

私のパソコンにはAPT-Xのデータや、その解毒剤、また、組織の

データをバックアップした物だっ
て入ってる

それにはまたパスワードを
かけてあるけど

それに、あなたに教えないのは・・・」

「・・・」

「プライバシーのため」

「はあああああああ！！！！」

プライバシーだあ？

そんなもんなのかよ！！」

「パスワードを書ける理由なんてそんなもんでしょ」

「じゃあ俺たちの仲は、プライバシーなんかで塞がれちまうような薄っぺらい仲なのかよ!!」

「何が言いたいのかさっぱりわかんないけど、あなたがそう思うならそうなんじゃないの?」

「はあああつあああああ！！！！？？」

「あーうるさいわね

耳の聴覚の機能は再開発されないの

1歳の時から100歳まで作り変わらないの！！

聴覚を無駄にしたくないからあっち行ってちょうだい！！」

「はあああああああああああ？？？？」

当然のごとく、その三十分後、俺の声は枯れ、のども痛かった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0449z/>

信じてるから、疑う

2011年12月16日20時45分発行